



絵本部会通信 11号

IAECE 第 42 回大会 9 月 26 日(日)絵本部会オンライン・ワークショップ

《グローバリズムを育む絵本》のご案内

2021 年 3 月 17 日

新型コロナウイルス感染症は、地球上の人為的な国境を自由に乗り越え、多くの尊い命を奪ってきました。経済と科学技術の進展で急激な発展を遂げてきた世界に大きな「待った」をかけています。人々は能率や合理性の追求に疲弊しながらも、逆風に抗い必死でこのウイルスとどう共生するかを模索しています。

グローバリゼーションが現象を指すのに対して、グローバリズムは、それを推進する理念と言われます。ヒト・モノ・カネそして情報を共有し、国を超えて地球を一つの共同体としてとらえる考え方です。

みなさまは、この理念を〈コロナ期〉にどうお考えでしょうか。

人生の土台作りとされる幼児教育では、すでにグローバルな視点に立脚し、世界で注目される実践は幼い人たちの育つ環境に積極的に取り入れられています。そして子どもたちに愛される普遍的な価値を持つ絵本は、国境を越え、時を超え、未来に寄与してきているのではないのでしょうか。

1845 年版の『もじゃもじゃペーター』（ほるぶクラシック絵本 1985 年）の 4 話目は「まっくろになったこどもたちのおはなし」です。向こうからくる黒い子を「くろインクみたいにまっくろだーい！」とはやすと、聖者が現れ諭します。それでも嘲笑うのをやめない彼らは、黒いインク壺に頭のとっぺんまでどっぷり浸されます。繰り返される BLM のデモ報道のたびに 175 年も前、ドイツのある父親が 3 歳になる息子のために描いたこの絵本の良識を、良心に問いかけながら思い返します。

『かしこいビル』（ペンギン社 1982 年）はイギリスの父親が幼い娘のために 1926 年に創作した作品。おばの家に招かれた女の子は準備でトランクにあれもこれもと詰めた結果、大事な人形のビル近衛兵を置き忘れます。さあ、かしこいビルはどうやって彼女に会えたのでしょうか。95 年前の人形ファンタジーの傑作です。コロナ期に園の人形ごっこ遊びも三密ゆえに制限され、この絵本をくりかえし読んだ保育者がいました。

みなさまの心に深く記憶している絵本は何でしょうか。そのグローバルな「なぜ」を話し合える楽しい場を、今秋の絵本部会ワークショップオンラインは用意したいと考えております。奮ってご参加ください。

(宮地敏子)

問い合わせ先：絵本部会事務局：松本由美 ymat@lba.tamagawa.ac.jp